

序文

今回、本増刊号では「関節鏡手術の最新の話」を取り上げました。関節鏡は世界に先駆けてわが国で開発され、実用化されたものです。1955年、東京通信病院で「関節鏡の父」といわれる渡辺正毅先生によって、世界で初めての関節鏡視下手術が行われました。当初は直接関節鏡を覗き込んで手術を行っていたのですが、その後ビデオ、そして各種の鏡視下手術器具が開発され、多くの手術が関節鏡で行われるようになりました。また膝関節だけではなく、そのほかの各関節、また関節外の手術においても、その対象は広がってきています。

本増刊号では、各関節の鏡視下手術について、現在わが国でそれぞれの分野において第一線で活躍されている先生方にご執筆をお願いしました。いずれの論文も、まずはじめに手術のポイントが箇条書きされており、その後図や写真が効果的に用いられ、手技の実際がわかりやすく解説されています。以下、各項目別に内容の概略を紹介します。

まず肩関節では、反復性肩関節前方脱臼と腱板損傷という頻度の高い問題について、2編ずつ、そしてSLAP損傷を加えた5編の寄稿をお願いしました。肘関節、手関節・手も以前から鏡視下手術が行われている部位であり、各部位での経験豊富な先生方に稿を作成いただきました。股関節は近年、FAIや関節唇損傷に対する鏡視下手術が注目され、手術件数や関連論文の数が増加してきています。ここでは手技的な問題だけでなく、病態の把握や手術の意義ということも合わせて学んでいただければ、と思っています。膝関節は関節鏡手術の対象となる外傷・障害の最も多い関節です。今回はそのなかで代表的な手術を取り上げ、現時点でのcontroversyや課題を記述していただきました。足関節は特にスポーツ障害との関連で、近年鏡視下手術が良く行われるようになっていく部位です。この項では、それら障害の病態の把握とあわせて、手技を学んでいただければ、より理解が深まると思います。

関節鏡手術の領域では、他の領域と同様、新たな知見の発表や手術器具の開発により、年々その適応や手技は変遷してきています。本増刊号は、関節鏡手術を行っている、またこれから始めようとする整形外科医に対して、その最新の情報を提供できるものであると思っています。

最後にご多忙なか、ご執筆の労をおとりいただいた先生方に心より感謝の意を表する次第です。

兵庫医科大学整形外科
吉矢晋一